

アクセントとは何か

ポイント解説 「雨アメ」と「飴アメ」は、声の高さ（ピッチ）で意味が区別されている。日本語は声の高さ（ピッチ）が単語の意味を区別する言語だが、声調言語ではなく、「アクセント言語」の一種である。

Keyword ▶ アクセント、ピッチ、拍（モーラ）、弁別的、声調言語、平板型と起伏型、イントネーション

基本編

1.1 方言のアクセント

テレビドラマではいつの時代でも、坂本龍馬や西郷隆盛といった維新の英雄たちの人気が高い。ドラマに出演する龍馬や西郷役の俳優たちは、その雰囲気ができるだけ忠実に再現するため、標準語ではなく、英雄たちの出身地（土佐や薩摩）の方言で会話している。

俳優たちが再現する方言の特徴の中には、その土地独特の言い回しなども含まれるだろうが、やはり何と云ってもその雰囲気作りに欠かせないのはそれぞれの方言の「アクセント」の特徴だ。

声の高さのことを「ピッチ」と言うが、東京方言の「雨」と「飴」という単語の発音のピッチがどのようになっているか、(1) で見てみよう。

(1) 日本語東京方言の「雨」と「飴」のピッチ曲線

ア メ（雨） ア メ（飴）



この2つの語のピッチ曲線を見比べると、「雨」はピッチが高く始めて途中で急に下降するのに対して、「飴」は少し低めに始まって途中からゆっくりと上昇していることがわかる。

今、ピッチの相対的に高いほうを「ア」のように、文字の上に線を引

いて示すことにしよう。そうすると、たとえば東京の「雨」という単語は「アメ」のように示され、「飴」という単語は「アメ」のようになる。

日本語の面白いところは、こうしたピッチの上がり下がりの特徴が、方言によってさまざまに異なることである。

それでは、この東京方言の語のピッチの特徴を「飴」「山」「雨」という3つの語を例にとって、龍馬の出身地である土佐の高知方言、西郷隆盛の出身地である薩摩の鹿児島方言と比べてみることにしよう。

(2) 東京、高知、鹿児島のパッチの違い

	東京	高知	鹿児島
(a) 飴、飴が	アメ、アメが	アメ、アメが	アメ、アメが
(b) 山、山が	ヤマ、ヤマが	ヤマ、ヤマが	ヤマ、ヤマが
(c) 雨、雨が	アメ、アメが	アメ、アメが	アメ、アメが

まず、東京と高知を比べてみよう。

「飴」という語は、東京では「アメ、アメが」のようにやや低く始まって2つ目の文字のところで上昇するが、高知では、最初から高く始まり、「アメ、アメが」のようになっている。「山」という語は、東京では「ヤマ、ヤマが」のように2つ目の文字のところにピッチの頂点がくるが、高知では反対に「ヤマ、ヤマが」のように1つ目の文字のところにピッチの頂点がくる。ところがこれとはまったく逆に、「雨」という語は、東京では「アメ、アメが」のように1つ目にピッチの頂点がくるのに対して、高知では「アメ、アメが」と2つ目のほうに頂点がくる。

こうしてみると、高知のアクセントと東京のアクセントには、かなりの隔りがあることがわかるだろう。語によっては、ピッチの頂点の位置が、まったく逆と言ってもよいくらいである。

龍馬が江戸に出てきた時も、故郷の土佐のアクセントと、江戸の庶民の話すことばのアクセントには、このような隔りがあったはずだ。江戸っ子たちの会話を聞きながら、龍馬はどう感じただろうか。

さて、今度は、西郷さんの母語である鹿児島方言を見てみることにしよう。(2) を見るとわかるように、鹿児島では、「飴」という語は「アメ、

の部分までを取り出して比較してみると、よくわかる。

(6) 東京方言の「箸、橋、端」のアクセント

ハシ (箸)	ハシ (橋)	ハシ (端)
ハシ が…	ハシ が…	ハシ が…
ハシ から…	ハシ から…	ハシ から…

「箸」や「橋」では、助詞が付いても、そのピッチの頂点の位置は変わらない。「箸」はいつも第1拍目が高く、その直後に下がり目があり、「橋」はいつも第2拍目が高く、その直後に下がり目がある。

これに対して「端」という語は、助詞が付くと、「ハシ (端)、ハシが、ハシから」のように、その助詞も含めた文節全体が高く平板に発音され、その高いピッチが語句の最後の拍まで連続する。

つまり「端」では、「箸」や「橋」と違って、際立ったピッチの下降がどこにも生じない。このように語句全体を通して急激な下がり目がなく、高いピッチが何拍にもわたって持続するようなアクセント型のことを、「平板型」と呼んでいる。

実はこの平板型は、現代の東京方言では、ハシ (端) の他にも、「風、魚、鶏、鼠色」(カゼが、サカナが、ニワトリが、ネズミイロが…) など、多くの単語に出現する。

Column.3 平板型の外来語

東京方言では、平板型で発音される語は、和語だけではなく、「アメリカ、フランス、イギリス、ガソリン…」などの外来語にも、数多く存在する(また、平板型は「パソコン、セクハラ、連ドラ、合コン、イケメン、イタメシ…」などといった複合省略語にも、よく現れる)。

さらにドラマ、セミナー、スニーカーなど、かつては起伏型で発音されていた語が平板型に次第に変化していく「平板化」という現象も、東京方言で現在進行中だ。平板型は、(東京方言では) 実は勢力のあるアクセント型である。つまりこれは、もともとその所属語彙の数が多く、また今後もそのメンバーが増え続ける可能性をもった型である。

これに対し、「箸」(それらを含む文節) は、ハシ (箸)、ハシが、ハシカラ、「橋」はハシ (橋)、ハシが、ハシカラのように、どこかで必ず下がって終わっている。この「箸」や「橋」のように、どこかに下降が現れるアクセント型は、「起伏型」と呼ばれている。

東京方言では、平板型か、起伏型か、ということが重要な意味を持つのだが、これについては第3章でもう一度、見ていくことにしよう。

発展編

1.4 高さアクセントと強さアクセント

ところで、「アクセント言語」と言うと、まっさきに思いつくのは英語ではないだろうか。英語にも、東京方言と似たような「位置」による単語の区別があるので、英語は日本語と同じ「アクセント言語」である。

たとえば、英語の名詞と動詞のペア *export* (輸出) と *export* (輸出する)、または、*présent* (プレゼント) と *présent* (提示する) は、「アクセントが第1音節にあるか、第2音節にあるか」によって、その品詞の違いが示される。

このように英語も、「どこ」にアクセントがあるかという情報が弁別的なので、「アクセント言語」である。

しかし、日本語と英語のアクセントの実現のしかたには、少し違いがある。日本語とは違って英語では、アクセントの置かれた音節と置かれていない音節の差をつけるのに、声の高さだけではなく、音節全体の長さ、声の大きさ、母音の音色の違いなど、ピッチ以外のいろいろな特徴を使う傾向がある。

たとえば英語の *présent* (プレゼント) と *présent* (提示する) の第1音節 (*pre* の部分) は、アクセントが置かれた前者のほうが、アクセントの置かれていない後者よりも、ずっと長めに発音される。英語のアクセントは、音節の長さにも影響を与えるとってよい。

また英語では、アクセントの置かれた音節には [ou]、[ai]、[ei]、[æ]、[a] などさまざまな母音が現れるのに対して、アクセントのない音節

(9a) では、話し相手が明日もここに来ることを知ってびっくりした、という気持ちを表現している。この場合、東京方言では文末の「か」の部分に急激な上昇調（↑）で発音する。これに対して (9b) は、あらかじめ予測していた（あまりよくない）事態が、思ったとおりに起こってしまったことを暗示している。このような「落胆」の気持ちを込めて発話される場合、文末の「か」は、それ以前の「です」よりも低く発音され、やや下降ぎみのパターン（↓）で発音される。このように、私たちは、声の上昇や下降の度合いをいろいろと調節しながら、発話時の微妙な感情も表現し分けている。

このようにピッチは、発話の焦点を明示したり、発話に伴う感情を表現したりするのにも役立っている。しかし、このようなピッチの使い方は、「箸」「橋」「端」などの例で見たような、単語どうしの意味の区別を示す働きとは関係がない。

(8)や(9)で見た例は、単語レベルの機能ではなく、発話レベルでのピッチの働きを示すので、このような現象を「アクセント」とは区別して、「イントネーション」と呼んでいる。

文字で書くとまったく同じになってしまうこのような違いも、話し言葉では、ピッチの頂点の位置や、その上がり方や下がり方を調節することによって、きちんと表現し分けている。

Column 4 「きれいな空と海」の2つの意味

イントネーションには、焦点表示や感情表出の機能があるだけでなく、文の「構造」の違いを示す役割もある。たとえば、次の文を、(a) と (b) の2種類の意味で発音し分けてみよう。発話全体のピッチ曲線も、それによって変わってくるのがわかるだろう。

その窓からは、きれいな空と海が見えた。

a. 空と海の両方がきれいだった、という意味

b. きれいなのは空で、海はそうではなかった、という意味

これは、「きれいな」という形容詞が「空と海」両方を修飾しているか、それとも「空」だけを修飾しているか、という文構造の違いである。このような違いを示すための声の高さの使い道も、アクセントではなく、イントネーションとされている。

読書案内 (さらに知りたい人のために)

川越いつえ (2007) 『新装版 英語の音声科学』 (CD付) 大修館
(第10章に日英語のアクセントの違いについての解説がある。)

田中真一／窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室—理論と練習』 (CD付)
くろしお出版 (第3章と第4章で、アクセントの役割やイントネーションの機能について、具体例をあげ、わかりやすく解説している。)

斎藤純男 (2009) 『日本語音声学入門』 (改訂版) 三省堂
(第4章と第5章に、アクセント、イントネーションとは何かについての説明がある。)

第1章／練習問題

次の (1) ~ (15) までの2拍の名詞は、東京方言では、「a. 箸」「b. 橋」「c. 端」のうち、どれと同じアクセントを持っているだろうか。助詞の「ガ」や「カラ」を付けながら、分類してみよう (NHK編『日本語発音アクセント辞典』を参照するとわかりやすい)。

a. ハシガ (箸) b. ハシガ (橋) c. ハシガ (端)

- | | | | | |
|--------|---------------------|---------------------|---------------------|---------|
| (1) 空 | (2) 蟻 ^{あり} | (3) 網 ^{あみ} | (4) 鼻 | (5) 虫 |
| (6) 花 | (7) 傘 ^{かさ} | (8) 池 | (9) 桶 ^{おけ} | (10) 声 |
| (11) 鳥 | (12) 星 | (13) ドア | (14) バス | (15) ゴム |

ポイント解説 東京方言では、語ごとに覚えておくアクセント情報は、ピッチの「下がり目」の有無とその位置だけでよい。その下がり目に注目して分類してみると、名詞にはその拍数に応じてアクセント型の数が規則正しく増えていくような「体系」があることがわかる。

Keyword ▶アクセントの型、アクセント体系、n+1型体系、核、アクセント規則、昇り核、下げ核

基本編

2.1 アクセントは体系を持つ—1~4拍名詞のアクセント

前の章では、「箸、橋、端」を例にして、東京方言の2拍名詞のアクセントの区別には、次のような3つがあることを見てきた。

(1) 東京方言の2拍名詞のアクセント3種類

起伏型		／	平板型
1. 箸	2. 橋		3. 端
ハシが…	ハシが…		ハシが…
ハシから…	ハシから…		ハシから…

東京方言の2拍名詞を集めてみると、どんな名詞のアクセントもこの3つのタイプ（「箸」、「橋」、「端」）のどれかと同じピッチパターンを持つ。たとえば、「ソラ（空）、ウミ（海）、フネ（舟）」は「箸」と同じ、「ヤマ（山）、カワ（川）、ハナ（花）」は「橋」と同じ、「トリ（鳥）、カゼ（風）、ハナ（鼻）」は「端」と同じアクセントである。

東京方言の2拍名詞のピッチパターンには、この3種類しかない。

このように、各方言によって拍数に応じて数が定まっているピッチパターンのことを、アクセントの「型」と言う。東京方言では、たとえば

「空、海、舟」は「箸」と同じ型を持ち、「山、川、花」は「橋」と同じ型を持ち、「鳥、風、鼻」は「端」と同じ型を持つ、と言う。

では、もっと長い単語はどうなっているのだろうか。

そこで、3拍名詞のオヤコ（親子）、イトコ（従兄弟）、オトコ（男）、コドモ（子ども）という4つの語を例にとって、それに助詞のガ、カラを付けて文をつくってみよう。そのアクセントは次のようになる。

(2) 東京方言の3拍名詞のアクセント4種類

オヤコが… イトコが… オトコが… コドモが…
オヤコから… イトコから… オトコから… コドモから…

オヤコは〇〇〇（ガが付くと〇〇〇ガ）、イトコは〇〇〇（ガが付くと〇〇〇ガ）、オトコは〇〇〇（ガが付くと〇〇〇ガ）、コドモは〇〇〇（ガが付くと〇〇〇ガ）となる。

そのうちオヤコ、イトコ、オトコは、下がり目がどこかにかならずあるので「起伏型」で、コドモには下がり目がどこにもないので「平板型」である。

Column 1 オトコとコドモのアクセント

オトコ（男）とコドモ（子ども）のアクセントの違いは、語単独だとわかりにくいですが、助詞のガやカラなどを付けるとはっきりする。オトコの場合はオトコガ、オトコカラのように助詞の直前に下降が出現するのに対して、コドモのほうはコドモガ、コドモカラのように助詞を付けてもどこにも下降が生じない。したがって、この2つの語は違うアクセント型を持っていることがわかる。

先ほど見た2拍名詞と同様、東京方言で3拍の名詞を集めてみると、かならず(2)の4つの型のどれかと同じアクセント型を持つことがわかる。たとえば、「命（イノチ）、朝日（アサヒ）、鳥（カラス）」はオヤコ（親子）と同じ型、「団扇（ウチワ）、卵（タマゴ）、蕎麦屋（ソバヤ）」はイトコ（従兄弟）と同じ型、「言葉（コトバ）、袋（フクロ）、女（オンナ）」はオトコ（男）と同じ型、「魚（サカナ）、大人（オトナ）、車（クルマ）」